

「成城国文学」

【第35号】		2019年3月 発行
山田 直巳	雲南白族の「踏喪歌」と日本「踏歌」 ——映像を介して、その源流を探る——	
後藤 昭雄	『扶桑集』の詩人(一)	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十一) ——入札目録の写真から——	
成田 大知	「白露に風の吹きしく秋の野」の情景 ——文屋朝康・後撰集三〇八番歌について——	
十河 由樹	佐藤直方講「拘幽操辨」再考	
藍木 大地	『苦心の学友』を読む ——〈変化〉の視点から——	
磯部 祥子・小林 真由美・山田 尚子	『本朝文粹』卷第十三の研究 ——表白文一篇・願文二篇の注釈——	
賀川 歩美	「女郎花」の和と漢	
山田 尚子	貴重書室から② 亀井孝旧蔵古活字版コレクションより〈その2〉	
【第34号】		2018年3月 発行
後藤 昭雄	《講演記録》菅原是善の願文と王勃の文章	
小林 真由美	《論文》『善悪因果経』管見—『東大寺諷誦文稿』『日本靈異記』『平家物語』など	
廣川 達也	素性法師の「なでしこ」の歌—古今集二四四番歌について—	
成田 大知	物語の現実感—源氏物語の世界構築について—	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(十)—入札目録の写真から—	
山田 尚子	貴重書室から① 亀井孝旧蔵古活字版コレクションより〈その1〉	
【第33号】		2017年3月 発行
枋尾 武	《講演記録》『山海経』における神鳥鳳凰 —異鳥なれど異鳥にあらず—	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(九) ——入札目録の写真から——	
北條 加奈	〈研究レポート〉比蘇寺縁起考 ——仏像の用材の問題を中心に——	
上野 英二	〈研究レポート〉古今和歌集の巻頭歌 ——去年とや言はむ今年とや言はむ——	
小林 加奈	〈研究レポート〉『心学早染草』の「理屈」	
南 明希	〈研究レポート〉『搜神記』における龍 ——古巢老姥譚をめぐって——	
村上 碧 竹内史郎	日本語ローマ字表記における外国人への「配慮」について ——YEN・TOKIO・NIPPON——	
【第32号】		2015年3月 発行
後藤 昭雄	嵯峨朝における新樂府受容をめぐって	
清水 由美子	四類本『保元物語』の時代認識—冒頭のことは「中比」をめぐって—	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(八)—入札目録の写真から—	
新永 悠人	北琉球奄美大島湯湾方言の複数または例示を表すkjaとnkjaの形式的分析	
【第31号】		2015年3月 発行
山田 尚子	司馬相如伝の受容と展開	
小島 孝之	古筆切拾塵抄・余話 —「宮本切」という古筆切について—	

糸井 久	《研究レポート》 「女はらから」と「ほい(本意)にはあらで」の解釈をめぐって —『源氏物語』より『伊勢物語』を照らして—
藍木 大地	『笑の王国』拾遺 —佐々木邦研究ノート2—
【第30号】	2014年3月 発行
今西 祐一郎	通俗と啓蒙 —江戸時代出版史一斑—
山田 直巳	古代和歌の「ふるまい」 —その歌舞／音曲／儀礼—(上)
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(七) —入札目録の写真から—
荒井 裕樹	〈狂気〉の語り方 —樋口一葉「うつせみ」論
鳥居 千恵	中里恒子 小説「乗合馬車」論 —日本近代文学史上初の女流芥川賞作家と横光利一—
藍木 大地	《研究レポート》 佐々木邦研究ノート —『笑の王国』の諸短篇より—
【第29号】	2013年3月 発行
後藤 昭雄	「納和歌集等於平等院経蔵記」私注
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(六) —入札目録の写真から—
佐々木 孝浩	室町期東国武士が書写した八代集 —韓国国立中央図書館蔵・雲岑筆『古今和歌集』をめぐって—
真島 望	近世地方地誌の生成と伝播 —鈴木秋峰『豆州熱海地志』を例として—
鳥居 千恵	横光利一「秘色 ^{ヒソカ} 」論 —作品の人物と伊勢詣の舞台設定を視座として—
大谷 千晶	坂口安吾「蟬」私解
横田 彩花	伊藤里和著『夢想の深遠 夢野久作論』
【第28号】	2012年3月 発行
井上 健	大正作家の翻訳しようとしたものは何か —谷崎潤一郎、佐藤春夫を中心に—
長塚 祐季	刀剣の文学史 —古代・中古を中心に—
藤井 由紀子	「昔物語」孝 —『源氏物語』の表現手法—
後藤 昭雄	延久三年「勸学会記」本文再考
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(五) —入札目録の写真から—
横田 彩花	谷崎潤一郎「孝」の教えをめぐって —「不幸な母の話」孝—
水島 佑	梶井基次郎「Kの昇天(或はKの溺死)」 —「私」の二重性について—
工藤 力男	字音接辞(化)の論
朽尾 武	小島憲之「上代日本文学と中国文学」上における類書の研究
【第27号】	2011年3月 発行
竹内 史郎	ツツアルの歴史的展開 —文体差に着目して—
妹尾 昌典	『土佐日記』解釈の諸問題
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(四) —入札目録の写真から—
本間 正幸	「唐萱」考 —『冬の日』における野水の句をめぐって—
菅井 松樹	焦土の中の「人間」

兀兀 卍卍	—田村泰次郎「肉体の門」覚え書—
田澤 一穂	木から見る寺社縁起の一考察
佐佐木 定綱	なめとこ山の熊 —三つの世界と小十郎—
【第26号】	2010年3月 発行
小泉 浩一郎	谷崎文学の思想 —『痴人の愛』を中心に—
土井 知子	『拾遺百番歌合』の伝本について
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(三) —入札目録の写真から—
安田 吉人	立羽不角年譜稿(終)
吉野 由衣子	荒木田麗女『怪世談』典拠再考 —「秋の霜」と「朝雲」と
揖斐 高	『五山堂詩話』巻七「増補版」のことなど
後藤 昭雄	『和漢兼作集』下巻の基礎的考察
【第25号】	2009年3月 発行
小島 孝之 土井 知子	成城大学本「拾遺百番歌合」翻刻
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(二) —入札目録の写真から—
根木 優	駒澤大学図書館所蔵『仏乗禪師東帰集』(書入れ本) —翻刻と解説—
真島 望	近世説話の生成一斑 —菊岡沾涼『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌—
工藤 力男	史学と語学のあいだ —壬生をめぐって—
上野 英二	ことばの深みへ —佐竹昭広先生の学問—
工藤 力男	佐竹昭広「音と光—「玉響」解説の方法—」 『国語国文』第廿二巻八号(昭和廿八年八月)
【第24号】	2008年3月 発行
後藤 昭雄	坤元録屏風詩をめぐって
木村 高子	安積山歌詠考 —山の井、などさしも浅きためしになりはじめけん—
小島 孝之	古筆切拾塵抄・続(一) —入札目録の写真から—
真島 望	菊岡沾涼の絵入俳書
工藤 力男	引用と段落をめぐる閑話
中野 三敏	江戸文化再考 —そして近代の成熟—
【第23号】	2007年3月 発行
小島 孝之	民間伝承における土地の創生と神をめぐって
宮脇 真理子	臼井六郎復讐譚について —『冬楓月夕栄』刊前刊後—
宮山 昌治	中国におけるベルクソン哲学の初期受容 —『民鐸雑誌』柏格森號を中心に—
工藤 力男	格支配から読む人麻呂歌集旋頭歌 —手力つとめ織れるころもぞ—
武部 健一	『山海経』研究の歴史とその現代的意義
山田 俊雄	日本人が日本語を書きあらわす普通の方法
YAMADA Toshio	PRESENTATION DU SYSTEME D'ECRITURE JAPONAIS (COMMENT LES JAPONAIS ECRIVENT-ILS LEUR LANGUE)
畠山 有紀子	日本語とリズム —現代における韻律—
【第22号】	2006年3月 発行
上野 英二	みよしのゝたのむのかりも —「狩と恋」拾穂—

工藤 力男	格助詞の射程 －後見むと君が結べる－
朽尾 武	橋本閑雪『南船集』小考 －山田俊雄先生を偲ぶ－
妹尾 昌典	戎昱<<早梅>>詩と李羣玉<<寄友>>詩
武部 健一	『山海経』の意味するもの －郭郭『山海経注証』の自序に見る、本質とその意義－
【第21号】	2005年3月 発行
小倉 脩三	蓮田善明と三島由紀夫 －小説「有心」を中心に－
岡崎 真紀子	説話の展開と歌学 －『俊頼髓脳』における「芹摘みし」説話をめぐって－
加藤 三重子	山田詠美「ひよこの眼」のパースペクティブ －〈学級〉に取り込まれたテキストの法則－
宮脇 真理子	伊東橋塘の講談落語本 －速記本出現前後－
工藤 力男	複合動詞論序説 －とれたて・生まれたて－
妹尾 昌典	宮崎修多校注『怨軒文鈔』『怨軒遺稿』
安元 隆子	近藤典彦著『『一握の砂』の研究』
安部 久美	影山恒男著『立原道造と山崎栄治 困難な時代の蜜房』
【第20号】	2004年3月 発行
近藤 典彦	『一握の砂』巻頭歌考
真島 望	菊岡沾涼の俳諧活動
生方 智子	『はやり唄』における描写の欲望
池上 玲子	正統ゆえの異端 －『行人』論
角田 香苗	『行人』の地政学
朽尾 武	滇金絲猴を求めて －雲南の旅－
青柳 恵介	教育研究所にて保管している「小林秀雄文庫」について
宮山 昌治	「感想」とメルロ＝ポンティ －小林秀雄の蔵書から－
妹尾 昌典	『中華若木詩抄』の若干の問題について
西村 亜希子	『日本靈異記』と『冥報記』の冥界
工藤 力男	愉楽と警世の書 －山田俊雄著『日本のことばと古辞書』を読む
【第19号】	2003年3月 発行
前田 雅之	三国／本朝・公／私・今昔物語集 －中古・中世における世界＝日本認識と公共性をめぐって－
渡辺 真優佳	鶯のこぼれる涙いまやとくらむ －『古今集』『二条後の春の初めの御歌』考－
本間 正幸	『別座鋪』の笑い －蕉門における「笑い」の変遷の中で－
工藤 力男	日本語練習帳・続貂
【第18号】	2002年3月 発行
山田 俊雄	『兵員要語帖』といふ資料
星野 貴志	景清論 －『平家物語』諸本が形成する景清像の考察－
中野 真麻理	梟山伏攷
小林 千草	仮名草子『伊曾保物語』の寓話と中世史実 －織田信長と「御袋様」との母子関係
蔵本 博史	受容の差異 －『無惨』と「探偵叢話」－
阿部 高裕	メディアとしての言語／苦悩としての言語 －『行人』の今日性－
加藤 三重子	志賀直哉『灰色の月』のポリティクス

根木 優	『和漢朗詠集』巻下、竹、四百三十三番について
西崎 美登利	「高等遊民」であること —『彼岸過迄』論—
朽尾 武	『怪奇鳥獸圖巻』(工作舎刊)を読む
【第17号】	2001年3月 発行
生方 智子	心理を描写する —『蒲団』における観察の技法—
宮山 昌治	「修養」の系譜 —自然主義前後の思想状況—
毛利 恵	終わりなき非日常 —『秘密』論
清野 寛	幻滅される故郷 —安部公房『けものたちは故郷をめざす』論
青島 千恵	「あひゞき」と人情本
角田 香苗	青年たちのルールブック
奥田 勲	『西行・芭蕉の詩学』を読む
藤井 貞和	『平家物語の歴史と芸能』ノート
【第16号】	2000年3月 発行
上野 英二	狩と恋 —伊勢物語ノート—
林 圭介	<知>の神話 —夏目漱石『それから』論—
吉田 志穂	物語としての地図 —田山花袋『蒲団』論—
蔵本 博史	探偵小説の成立へ
小野 亮	道化師の誘惑 —コミュニケーション・モデルとしての『道化の華』—
根木 優	『三国志演義』における格言について
妹尾 昌典	漢文雑記
紅野 謙介	大川公一著『竹林の隠者 —富士正晴の生涯—』
乾 善彦	工藤力男著『日本語史の諸相 —工藤力男論考選—』
木股 知史	石原千秋著『漱石の記号学』
【第15号】	1999年3月 発行
工藤 力男	現代表記の論理と美学
宮山 昌治	有島武郎とベルクソン受容 —神を語ること／語らないこと—
加藤 三重子	志賀直哉「国語問題」の政治学
吉田 志穂	欲望の構図 —『少将滋幹の母』論—
海老海 求美	『砂の女』のディスクール
岡 真紀子	俊頼髓脳所収和歌本文礼記
高木 信	兵藤裕己著『平家物語—<語り>のテキスト』
藤森 清	石原千秋著『反転する漱石』
【第14号】	1998年3月 発行
岡 真紀子	俊頼髓脳における古今集の享受 —七叟の歌から尚齒会和歌へ—
本間 正幸	再版本の<<キズ>>跡 —『別座鋪』版元不明本をめぐる—
鈴木 章弘	正岡子規「小園の記」の思想圏 —「写生」という問題—
生方 智子	「新しい男」の身体 —『それから』の可能性—
甲田 晶子	大正期の谷崎潤一郎 —『痴人の愛』に至るまで—
斉藤 順司	エディプスの政治学 —中上健次『岬』論—
石原 々美子	セクシュアリティの病

白鳥 八天丁	—『人間失格』論
【第13号】	1997年3月 発行
兵藤 裕己	オーラル・ナラティブの近代
妹尾 昌典	『千載佳句』の資料的価値について
三浦 幸子	光源氏と朱雀院 —斎宮女御入内をめぐって—
大木 正義	彗星の詩学 —『門』論—
渡辺 千恵子	「富嶽百景」背景考 —「桜」から「月見草」への変奏—
阿部 高裕	読まれる女の修辞学 —『或る女』論
西村 謙一	開かれた「山」 —新田次郎『強力伝』論
加藤 洋介	上野英二著『源氏物語序説』
【第12号】	1996年3月 発行
伊藤 博之	西行の恋の歌
辰巳 正明	恋歌 —古今集の文学景観論—
西村 準吉	徒然草序の説
松尾 勝郎	庵崎考
本間 正幸	《 ^{シグレ} 霽》考 —レトリックとしての用字—
日高 佳紀	方法としての〈大衆〉 —谷崎潤一郎・『乱菊物語』の構想—
和田 潔	漢語の形成についての一考察 —「じょうだん」考—
堀野 理香	本居大平『萬葉集會評録』について
石原 千秋	小森陽一著『漱石を読みなおす』
山田 俊雄	かめいたかし著『ことばの森』のものがたり
【第11号】	1995年3月 発行
山田 俊雄	ある擬製漢字についての所感 —「裱」と「 ^社 裱 」と—
妹尾 昌典	道真の詩における若干の表現について
三浦 幸子	紫の上と明石の上 —若紫巻における明石の挿話をめぐって—
岡 真紀子	平安朝における王昭君説話の展開
中野 真麻理	鳥山の疲労侍 —『一乗拾玉抄』から—
市村 栄理	黙齋二世青娥の佯死と没年
河崎 典子	井伏鱒二『遥拝隊長』論 —「言葉」の戦争—
【第10号】	1994年3月 発行
小林 千草	中華若木詩抄と評語「アリアリト」
松本 宏司	催馬楽「浅緑」考
堀野 理香	『萬葉集略解』の宣長説
加田 謙一郎	『冠彌左衛門』の人物造型と観音信仰について
山下 寿美子	詩僧嵩俊海とその師大沼枕山
【第09号】	1993年3月 発行
拳 湖	バサラの語源のために
磯部 祥子	萬葉集における狩の歌 —巻二・一九一番歌をめぐって—
妹尾 昌典	『千載佳句』出典攷正
中野 真麻理	『熊野の本地』私注
影山 恒甲	福永武彦『忘却の河』の構造と意味についての試論

彩山 巨力	—記憶と罪の意識と始まりの位相—
【第08号】	1992年3月 発行
朽尾 武	『玉造小町子壮衰書』拾穂の記
小倉 脩三	「薙露行」(下) —その材源をめぐって—
東 茂美	輪廻する<憶良> —「沈痾自哀文」論—
小林 真由美	『日本靈異記』中巻第七縁考
王 浩智	切断する言葉 —「清心庵」の言語トポス—
中西 美弥子	手枕と源氏物語
【第07号】	1991年3月 発行
伊藤 博之	心の自覚の深化と中世文学
妹尾 昌典	『千載佳句』の校勘
中野 真麻理	『一乗拾玉抄』と氷上山興隆寺
近藤 典彦	石川啄木の借金の論理
王 浩智	<崖下>の系譜 —明治・大正小説における『都会の憂鬱』の位置—
大津 知佐子	たわむれる言の葉 —『或る女』の手紙—
山田 貞雄	「靦面」について
日高 佳紀	非在の身体／「雪子」という記号
松尾 勝郎	尾形侑著『俳句の周辺』
【第06号】	1990年3月 発行
尾形 侑	秋津が声
小林 高子	春日蔵人老「述懐詩」について
大矢 恭子	源氏物語の軌跡 —女君の定位と造型をめぐって—
宮脇 真彦	昌啄時代の連歌論「山彦」小考
上野 靖	蕪村評語考 —「しほからし」と「眼前致景」—
鎮目 稔	近世庶民と演能 —「河内屋可正旧記」をめぐって
牧野 宏子	抱一の光琳乾山顯彰資料
本間 正幸	「東海道四谷怪談」私見
安田 吉人	享保江戸俳壇と団十郎 —「父の恩」を中心に
山田 直己	この一篇
【第05号】	1989年3月 発行
山田 俊雄	「闇から牛」 —漢字とその訓についての話—
佐竹 真由美	元興寺之僧自嘆歌一首
松本 宏司	『梁塵秘抄口伝集』と『俊頼髓脳』
本間 正幸	初期蕉門撰集における構成意識 —『俳諧次韻』『冬の日』を中心に—
本間 也寸志	足穂ノート —中期小説の問題
外岡 浩	漂泊のエクリチュール —『草枕』論
大木 正義	灼熱する針の説話 —『道草』論—
清水 章雄	<思い出の書>
小森 陽一	今井信雄著『この道を往く 漂泊の教師 赤羽王郎』
【第04号】	1988年3月 発行
かめい たかし	ゾータン(雑談)・<<かなのためのかな>>としての“かな”
東 茂美	<朝戸出>の君 —大伴坂上郎女歌585について

安田 吉人	不角前句付考
大津 知佐子	波動する刹那 －『草枕』論
坂本 浩	高田君の代表的著述
【第03号】	1987年3月 発行
佐竹 昭広	大坂に後世願ひ屋 －『本朝二十不孝』私見
西島 恵美子	人妻ゆゑにわれ恋ひめやも
牧野 宏子	酒井抱一と水戸徳川家 －抱一晩年の一資料
鈴木 あゆみ	石川淳・あふれ出す言葉の力
王 理恵	『行人』論 －共振する沈黙への旅立ち
小森 陽一	<論争を読む／書く> －こころの行方
【第02号】	1986年3月 発行
伊藤 博之	伝承の変容とその論理 －『平家物語』にみる燕丹説話をめぐって
野田 浩子	従軍歌の構造 －<清なる自然> 試論1
工藤 晃子	気韻と触れ合う言葉／共棲の場 －梶井基次郎の初期作品をめぐって
湯浅 篤志	「短い長篇」の方法 －高橋和巳『散華』論
敷地 博	不言思本忠臣蔵 －丸谷才一『忠臣蔵とは何か』をめぐって
村上 左千子	現代に甦る近松 －近代演劇史における近松の役割
末内 紀子	誓歌の比喻 －かまくらのみこしのさきのいはくえの
大川 公一	<シンポジウムを終えて> 「善悪の彼岸過迄」としての「こゝろ」
【第01号】	1985年3月 発行
尾形 仵	芭蕉の“わび”とその成立
辰巳 正明	天平の歌学び －直訳体短歌の方法
渡辺 千恵子	『うたかたの記』論 －「ロオレイ」の構図をめぐって

石原 千秋	「ころ」のオイディプス －反転する語り
小森 陽一	「ころ」を生成する「心臓」
滝沢 美和子	梶井基次郎における音楽性 －自意識の表出と聴覚的リズム
木村 千恵子	憶良の瓜と栗
山田 貞雄	<この一篇>
西 譲二	

8—